

Brexit 騒動後の日本人移民の新たなポジショニング

—EU 離脱派の親戚を通してみるイデオロギーの中で—

秦かおり(大阪大学)

1. はじめに

本稿は、2016年6月23日に行われたEUからの英国脱退、通称Brexitの是非を問う国民投票とその後の多数の分析報道によって顕在化した移民排斥の動きの中で、自分の夫の親戚ですら移民排除を象徴する「EU離脱」に投票した事実を知った日本人移民たちが、どのようにその事態を受け止め、インタビューの場で語り、新しい英国社会の秩序の中で自らをどう位置付けて行くかを、談話分析の観点から解明することを目的とする。

具体的なリサーチクエスチョンとしては、1) 移民がその社会変化に直面したとき、その社会変化や環境との関係をどう表現し、その社会と自らの関係性をどう位置付けたか、2) 語りの場においてどのようなストラテジーが用いられたかに着目し、分析を行った。

また、本研究は単に今回の英国の社会的変動に止まらず、急速な社会的政治的変動によってその地に住まう(特にマイノリティの)人々が迫られる新社会秩序のもとでの新しい社会との交渉とアイデンティティの一例として考察する。

2. データについて

本稿では、2016年に31名、2017年に30名の在英日本人女性に実施したインタビューのうち、「EU離脱」についての語りと、それに関連する「夫の親戚」についての語りを中心に焦点を当てる。さらにそれらの中で、本稿で用いるデータは、2016年と2017年両方でペアインタビューを受けた以下の協力者の例を絞る。

表1. 協力者の基礎情報

協力者	仕事	夫の国籍	在英歴	子	夫との使用言語	居住地域
K	自営業	EU	17年	1	英語	ロンドン南東部
Y	専業主婦	英国	5年	1	英語	ロンドン南東部
調査者	研究者	日本人	(6年)	2	日本語	(ロンドン南東部)

* Kの夫の国籍は個人情報保護のため、「EU」とのみ記す。なお、調査者は現在日本在住であるが、過去に居住していた在英歴、居住地域を括弧内に記す。

上記のK、Y、調査者間で2016年、2017年に交わされたインタビュー会話をデータとする。KとYは在英歴が全く異なるが、子どもの年齢が近く、通わせている互助会が同じであることもあり仲が良い。この点において、KとYの親和性は高く、また調査者ともインタビューを重ねており、すでにラポールは築かれていると言って良いだろう。

今回のインタビューにおいて大きな隔たりとなって現れるのは、Kがもともと自ら語学力向上のために渡英し、仕事をし、自力で永住権を獲得して夫と結婚しているのに対し、Yは結婚をして移住しているいわゆる「結婚移民」であり、しかし永住権を獲得するには年数的にも至らない上、そのような気があるかどうか現時点では特に表明していない点である。さらに、Kの夫はEU移民であり、Yの夫は英国人であるという客観的事実も大きな異なりとして存在する。

分析では、まず国民投票3ヶ月後の2016年9月に収録したデータを分析し、さらにその後1年間に経験した出来事を踏まえて2017年のインタビュー時にどのように語りの中で自らのアイデンティティが変容したのかを探っていく。

3. 分析と考察

3.1 移民の細分化と差異化—2016年インタビューより

2016年のインタビューにおいて最初に顕在化するの、「結婚移民であること」か「自力で永住権を勝ち取った者」であることかの違いである。この違いは、やがて「努力の違い」となり、「努力せずに英国に入学してくるEU移民」へとスライドし、さらにその中でも「ベネフィット(日本でいう生活保護のようなもの)」をもらう人へとシフトして行く。

抜粋1 (2016年9月 Yの語り「イギリス人の妻」)

1. Y: でもなんかあれが始まる前から(.)なんか例えば日本人=
2. =例えばイギリス人の: >あのく 私は(.)え:と妻なんですけども::
3. I: うん

この抜粋1では、Yは一度「日本人」と自分のアイデンティティを生起した後に、今この場において生起すべきアイデンティティとして「イギリス人の妻」と言い直している。これに対し、黙って聞いていたKは以下のような語り始める。

抜粋2 (2016年9月 Kの語り「XX人の妻」)

4. K: ° んん::° どうなんだろう[↑ね::
5. Y: [↓ね:
6. K: h これはでも(1.0)確かに私たちはやっぱりわ-わたし::は
7. 別に >結婚してビザ取ったとかそういうのは全然ない[か× ら::=
8. I: [んん んん
9. K: もともとここ::に自分で(.)来て[(.)それで(.)あの::
10. Y: [永住権あるもんね
11. K: 学生やったり
12. I: うん
13. K: そいで仕事して
14. I: うん
15. K: そいで:::えと仕事同じところで5年間でいうの↑でビザ取って° とかいつて° >でもく
16. 今まですごいやっぱりビザは厳しい大変だったから お金もすごい費やしたしビザ取るのに↑ね(.)
17. そう(.)それが もうなんか た-例えばEUの人は↑ね 簡単に来れて↑ね↓え
18. Y: そうね
19. K: そうでそういう人がベネフィットもらっている人とかいるわけ[だし
20. I: [° そうね°
21. K: なんか(.6)ちょっとやっぱり私としては >今まですごい大変だったしお金も使ってるしそんなんずるいよなく
22. っているのはある(.)けど::

Kは6行目で「私たち」と述べた後に「わたし」と言い直し、「I」の語り始める。それは「結婚してビザ取ったとかそういうのは全然ない」(7行目)とYとは全く違うことを強調した上で「今まですごい大変だったしお金も使ってる」(21行目)ストーリーである。ところが、比較対象として最初に出して来ていた結婚移民から、17行目でターゲットは「EUの人」に移行し、さらにその中でも「ベネフィットもらっている人」(19行目)に細分化される。そしてそのベクトルの向かう先は「ずるい」(21行目)という評価(evaluation)である。ここで行われている論理は、同じ移民同士でも離脱派の論理と類似している。移民同士で細分化を行い、「ここにいてもよい正当な移民」と「ずるい移民」のベクトルを作り、自らを正当な移民に位置付け(positioning: Bamberg, 2014)、新しい社会秩序の中で居場所を確保しようとする一つの動きであろうと考えられる。しかし、その後22行目で「けど::」の後、残留派の論理への移行が見られる。

抜粋3 (2016年9月 Kの語り「移民がいないと成り立たない」)

23. K: ちょっとしん心配は正直あ↑る
24. I: あ:::
25. K: あの:: やっぱりエコノミー的な問題とかで↑も:::そうだ↑し:::そいでうち::も: パートナーは(.) ねえ=
26. I: =ああうん XX° 人の方ですよ°
27. K: でも XX 人だけ:::彼ももう 20 年近くいるから だ-別に出されるとかそういう心配はないから
28. I: うん
29. K: 別にそれは:::心配は全然してないけど
30. I: うん
31. K: でもただ >なんか× が生活し辛くするぶぶ-しづ-ん-あ::
32. なんだろう(.)不便になる部分は出てくるじゃないかなとは[ん::::
33. I: [ん::::
34. K: 特にロンドンに住んでると
35. I: ん::
36. K: やっぱり 田舎に住んでる人はイギリス人ばかりの世界で生活してるだろうし
37. I: ん::
38. K: ビジネスもイギリス人であってんからあんま変わんないだろうけど
39. I: ん::
40. K: ロンドンは↑ね::
41. I: うん

42. K: やーあの::外人いないと成り立たないと[思うから
 43. I: [そうですね
 44. K: そうその点でどうなってくるん[だろうっていうのは
 45. I: [うん

Kの言う、田舎はイギリス人ばかりだが、ロンドンには移民がいないと経済が成り立たないから移民は必要だ、という論理は残留派のもので、「移民はベネフィットを使って生活してずるい」という離脱派の論理とはかけ離れている。ここでKの語りには多くの「でも」や言い淀み、EU移民の妻としての立場が入り混じり、それが意見の変容を生み出すが、紙幅の都合上割愛する。

この2016年のインタビューの状況後、では1年を経て2017年にはどうなったのかを紐解く。

3.2 「移民は移民」－2017年インタビューより

2016年には特に出ていなかった国民投票後の義理の親戚の話が、2017年のインタビューでは繰り返し聞かれるようになった。英国の基本的なライフプランとして、老後は田舎で暮らす、あるいは元々地方出身の子供だけがロンドンに出てくるといったスタイルが多く、そもそも年老いた両親がロンドンで一緒に暮らしているということは調査協力者の場合は皆無であり、国民投票後もおそらく顔をあわせるのはクリスマスなど特別な行事である。1年巡り、それらの行事が終わった後様々な情報収集や経験を経ての語りとなる。

以下の抜粋4は、YとKが共に自分の義理の親戚が離脱（リーヴ）に投票してショックだった話をしている。

抜粋4（2017年9月 YとKの語り「自分の義理の親戚の話」）

1. Y: あたしはさあほら親戚いるじゃな↑い 田舎のほうに=
 2. K: =うん
 3. I: んん
 4. Y: ん: ていうと(.) <やっぱ>その親戚Pa-うちの主人のほうの親戚でさえもリーヴの方にヴォートしたから↑ね
 5. I: ° あ:: そうなん° =
 6. Y: で (地名) なんですよ[だからものすごい
 7. I: [あ:: あ::
 8. Y: Lak-湖水地方のほ↑う
 9. I: はいはいはい
 10. Y: ° だから° あそこらへんは全部リーヴだったでしょ?=
 11. K: £=自分の(.)親戚で(.)んふふ£
 12. I: リーヴだった?
 13. K: うん うち=
 14. Y: =ショックだったよね[(.)知ってたけ[どね(.)知ってたけど。
 15. K: [うち [でも うん
 16. I: うん
 17. Y: UKIP だったので(.)彼は、私のおじさん[(.)義理の叔父は。
 18. I: [うん
 19. I: うん
 20. Y: だからもちろんリーヴに投票したわけだけれども
 21. I: うん
 22. Y: でもやっぱ改めて考えるとちょっと(.)ちょっとショック hh っていうか@@

抜粋4では、YとKはお互いに自分の親戚がいるとして、主にYが自らの体験を語っており「知ってたけど」(14行目)、「改めて考えると」「ショック」(22行目)と述べている。ここではKも自分の語りを行おうとしており(15行目)、ターンを取れずに引き下がってはいるが、同様に自分の親戚の話をしようとしている。それに対し、抜粋5では、Kが主たる語り手となり友人の話をするが、上記の「ショック」の真の正体を暴いていく。

抜粋5（2017年9月 Kの語り「友人の夫の親戚の話」）

23. K: んん でも:: やっぱそういうのは:: 私も友達:: で::
 24. XXXX: 人で旦那さんがイギリスじ↑ん
 25. I: うん
 26. K: でもその XXXX 人っていても彼女は::: (EUの某国) のパスポート[も持ってる人だから
 27. I: [うんうん
 28. K: 一応ヨ-あ::の
 29. I: EUのね

30. K: そうEUの人で そいで(.)そしたらその旦那のほうのくもうかぞ↑く:: みんなやっぱリーヴに投票しててえ::=(
(中略)
69. K: でもなんかそしたら(.)くなんか> (1.3)も::おなんか旦那↑の(.)お母さん(.)異様にか::っときっちゃった
70. みたいで 私はでもねレイシストじゃないわよみたいな感じで ♪もうすごいなんか くなっちゃって♪
71. Y: @@@@
72. K: そんなことは言っていない[みたいな@@@
73. I: [@@@@@

Kの語りの中の友人の旦那のお母さんは問い詰められたわけでもないのにその雰囲気にも飲まれて「私はでもねレイシストじゃないわよ」(70行目)と叫ぶ。「そんなことは言っていない」(72行目)のにヒステリックに「レイシストじゃない」と叫ぶ義母の声は義母の声でもあり移民に直面しながらも離脱に投票した英国人の声である(Bakhtin, 1981). これをもってして、自分がいくら「正当な移民」であろうとなんであろうと、この国の「差別の対象」なのだとも明確になってしまったこと、そしてそれは自分の親戚ですらも変わらないと明示されたことを物語る。その後、「私たち外国人は」と自分を含めて移民を一般化し、こういう話はいっぱいあって潜在化していた気持ちがポンと出ちゃった、と、ジェスチャー行動付きで「ちゃった」の反復でresonance (Du Bois, 2007, 2014)を用いて共鳴しながら笑い合う。

ここで2016年から2017年の変化を考察する。2016年では移民を細分化し、いい移民と悪い移民を分けて新しい社会変容の中で自らをどこにポジショニングするかを探り、同じ「日本人」でもそれ以外の属性により新たなアイデンティティを前景化しようとする試みが見受けられた。しかし翌年の2017年、様々な経験を経て、どのような立ち位置であろうと(その属性がなんであろうと)、大勢側からすれば結局「移民は移民」であるという結論が導き出されていた。そこには急速な変容の中で一通りの経験を経て周囲を見渡し、客観的に自らに与えられたラベルを受け入れた上で、全体にナラティブの構造(Labov, 1967)を持たせてそれらを笑い話とし、連帯や共鳴を使用してその場の参加者がその状況を「同じ被差別者として笑い飛ばす」という状況を作り出していた。

4. 結語

本稿では、英国のEU離脱を問う国民投票が行われた2016年とその1年後の2017年に、在英日本人女性に実施したインタビュー調査を元に大きな社会的政治的変動があった社会に身を置くマイノリティである移民がそのアイデンティティの在りようをどのように変化させるのかを観た。その結果、今回排斥される恐れがある側であった「移民」である彼女らはそのカテゴリーを(今回のケースでは入れ子式に)分割していき、「そこにも良い正当な移民」から「(合法だろうけれども)ネガティブな評価を受ける移民」までのスケールを用いて、新しい社会秩序の中で自らを新たにポジショニングしようとする動きがあった。それは結局マジョリティ側に阻まれ「移民は移民」と一緒にされてしまうが、こうした被差別側がカテゴリーを分割していき正当なポジショニングを確保する例は歴史的にも類似例があり興味深い。このようなマクロ的な政治的決断による社会変動が、ごく普通の市井の人々のその社会における存在価値や居場所といった根幹にまで行き渡り揺るがしていく様子は、今後もミクロ分析を通して注意深く観察していきたい。

謝辞 本研究は、科学研究費T15K128760の助成を受けて行われた研究成果の一部である。

参考文献(抜粋)

- Bakhtin, M. M. (1981). *Dialogic Imagination: Four Essays*. Austin: University of Texas Press.
- Du Bois, J. W. (2007). The Stance Triangle. In Robert Englebretson (Ed.) *Stancetaking in Discourse: Subjectivity, Evaluation, Interaction*, 139-182. Amsterdam: John Benjamins.
- Du Bois, J. W. (2014). Towards a Dialogic Syntax. *Cognitive Linguistics* 25 (3), 359-410.
- Labov, W. & Waletzky, J. (1967). Narrative analysis. In June Helm (Ed.) *Essays on the Verbal and Visual Arts*, 12- 44, Seattle: University of Washington Press.

トランスクリプト記号

[オーバーラップ	:	長音	£ £	笑いながらの発語
° °	周辺よりも小さい音	(.)	2秒以下の沈黙	—	強調表現
(0.0)	それ以上の沈黙	< >	周辺よりも遅い音	> <	周辺よりも早い音
[(())	ジェスチャー	-	言い淀み	↑ ↓	音の上昇, 下昇
()	状況説明	=	続けて聞こえる発語		
(地名)	協力者匿名化のため地名を伏せている	XXXX	協力者匿名化のため国名を伏せている		